

全ての児童生徒にとって安全で安心な学校・学級づくり

昨年11月に、こども家庭庁・文部科学省より「いじめの重大化を防ぐための留意事項集」が公表されました。資料では、いじめ防止に向けた基本的な取組として「全ての児童生徒にとって安全で安心な学校・学級づくり」を挙げ、そのための具体的な四つの視点を示しています。

「安全で安心な学校・学級づくり」は、教育の基盤ともいえ、各学校においても様々な取組がなされていることと思います。ぜひ、本資料で示された視点なども参考にいただきながら、今後の取組の更なる充実につなげていただければと思います。

全ての児童生徒にとって安全で安心な学校・学級づくりの視点（留意事項集より）

① 多様性に配慮した学校・学級づくり

教室に、多様で異なる考えや意見を出し合える自由な雰囲気を確認し、児童生徒がお互いの違いを理解し、「他者の違いを理解し尊重することが必要である」「多種多様な人がいることで発想の幅が広がり、難しい課題の解決も可能になる」と思えるような機会をつくる必要があります。自分と他者の個性をそれぞれに尊重し、相手の立場に立って考え、行動できるようになることにより、共感的で、相互扶助的な人間関係をつくり上げることが必要です。

② 対等で自由な人間関係を構築する居場所としての学校・学級づくり

学校生活において、授業以外にも、部活動や文化祭・体育祭等の行事の運営など様々な観点から、児童生徒が興味を抱くこと、好きになれること、夢中になれることを探す機会をできるだけ多く提供し、その活動の中で、児童生徒が対等で自由な人間関係を構築できるようにすることが必要です。それとともに、児童生徒が、自分が行おうとしていることが認められ、周囲の人から応援してもらっていると感じることによって、学校も自分の居場所であると思えるようにすることが必要です。

③ 自分が誰かの役に立っていると思える自己有用感を育む

自分への信頼は、主体的に活動に参画することを通して、他者から認められ、他者の役に立っていると実感することにより育まれます。例えば、異年齢交流や学級・ホームルームの係活動、児童会・生徒会活動等において何ができるのかについて、児童生徒自身が考える機会を用意し、お互いに助け合いながら積極的に取り組むことにより、児童生徒の自己有用感が育まれます。

④ 「困った、助けてほしい」と言える環境づくり

困ったときや悩みがあるときに、一人で耐えるのではなく、弱音を吐いたり、人に頼ったり相談したりすることができる雰囲気があるかどうかは、児童生徒の学校での安全・安心を確保する上で非常に重要です。そうした雰囲気を醸成するためには、「困った、助けてほしい」という声を教職員がしっかり受け止める体制を学校の中に築く必要があります。日頃の何気ない会話をはじめ、ちょっとした相談にも丁寧に対応することを通じて、教職員との信頼関係が形成され、児童生徒に何か困ったことや悩みが生じたときの「相談してみようかな」という気持ちにつながります。

また、同日に「いじめの重大化を防ぐための研修事例集」も公表されており、

▶ 発達特性によるコミュニケーションの行き違いから生じたいじめ事例

▶ 進学直前に起きた SNS いじめと学校の対応

などが事例として取り上げられています。「もしこの場面に立ち会ったら」という視点を持つことで、自分事として捉えることができるようになるとともに、組織的な対応の改善点も見えてきます。ぜひ、校内研修等でご活用ください。

（参考資料）



いじめの重大化を
防ぐための留意事項集



いじめの重大化を
防ぐための研修事例集



※ 児童生徒が安心して生活し、所属感や連帯感を感じられる居心地のよい集団づくりについては、「学業指導の充実に向けて（改訂版）」（栃木県教委 R7.3）でも紹介しています。ぜひ、そちらもご活用ください。

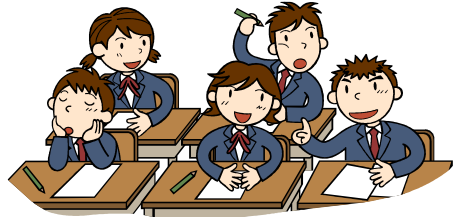
▶ <https://www.pref.tochigi.lg.jp/m09/education/gakkoukyouiku/seitoshidou/documents/2025gakugyousidou1.pdf>



先日、学級活動の授業を参観する機会がありました。題材は「身近な職業と職業選択」で、本時のねらいの一つは、「職業には求められる資質・能力があることに気付く、職業に対する視野を広げ、進路学習への意欲を高める」でした。授業の前半に、職業に必要な資質・能力を考えるという学習活動がありましたが、生徒にどのように考えたらよいか見通しを持たせるために、「教師」を例にして生徒とともに考える場面がありました。

先生が、「教師にはどのような資質・能力が必要でしょうか？」と生徒に問いかけると、数人の生徒が挙手をして次のように回答しました。「知識、指導能力、観察力、責任感、時間管理能力、優しくできる力…」

私は、はじめは「なるほど～」と思って聞いていましたが、徐々にこれらの回答には「生徒の思いや願い」がにじみ出ているように感じてきました。これらの回答が、まさしく生徒が教師に求めている資質・能力のように聞こえてきたのです。



私は、特に「観察力」という回答にドキッとしました。なぜなら、「人の心の中や気持ちは見えにくいものであり、表面上は穏やかな表情でも、心の中では泣いていたり、苦しみもがいていたりするかもしれない。そんな本当の気持ちに気付いてほしいと、訴えていたのかもしれない。」と想像が膨らんできたからです。

充実した学校生活を送っていると思われていた子どもが、突然不登校になるケースがあります。実は、心の中では不安や我慢がたまってきていたからであり、突然に起きたことではないのかもしれませんが。

以前、私が学校現場にいたとき、学年のリーダー的な存在であり、文武ともに優秀で、休み時間などは友人と楽しく過ごしているように見えた生徒がいましたが、突然登校できなくなり、理由もはっきりしないまま月日が経ち、卒業を迎えたということがありました。

表面上に表れた行動や表情には必ず理由があります。過剰なまでの善行をしたり大人の期待に応えようとしたりする子ども、落ち着いて席に座れない子ども、何度も嘘をついてしまう子ども、授業をよく聞いてノートをしっかりと書くが内容を理解できていない子どもなど様々な子どもがいます。ですから、我々教師には「何だろう？」と考え、その心の中や背景、理由等を探るような眼が必要だと思います。言い換えれば「子どものことを分かってもらう姿勢」とも言えますが、これこそが教師の専門性なのではないかと思います。

生徒たちは、教師に必要な資質・能力として「知識、指導能力、観察力、責任感、時間管理能力、優しくできる力」を挙げました。これらの言葉について、みなさんは何を感じますか？

河内教育事務所 HP も御覧ください。「竹林の風」バックナンバーも掲載しています。



教職員一人一人の誇りと品格は 教育への信頼を確たるものにする